北陸新幹線整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

郷クボタ遺跡

2011

石川県野々市町教育委員会
独立行政法人　鉄道建設・運輸施設整備支援機構

例　　言

1　本書は、郷クボタ遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2　遺跡の所在地は、石川県石川郡野々市町郷町地内である。

3　調査原因は、北陸新幹線整備事業に伴うものである。

4　調査は、独立行政法人　鉄道建設・運輸施設整備支援機構　鉄道建設本部大阪支社の依頼を受けて野々市町教育委員会が行った。

5　現地調査は、平成21年度に実施した。期間・面積・担当者は以下のとおりである。

期　間　　平成21年8月4日～9月24日
面　積　　320㎡
担当者　　横山貴広　　野々市町教育委員会文化振興課　専門員（文化財ＴＬ）

6　出土品の整理は、平成22年度に野々市町教育委員会が実施した。

7　報告書の刊行は、平成22年度に野々市町教育委員会が実施した。執筆・編集は横山が行った。

8　現地調査から出土品整理、報告書刊行に至るまでには、地元の方々をはじめとして下記の機関、個人の協力を得た。（五十音順、敬称略）

大西　　顕、白田　義彦、布尾　和史、米澤　義光、吉岡　康暢、石川県教育委員会
（財）石川県埋蔵文化財センター

9　本書についての凡例は以下のとおりである。

（1）方位は座標北を指し、座標は国土交通省告示の平面直角座標第Ⅶ系に準拠している。

（2）水平基準は海抜高であり、Ｔ．Ｐ（東京湾平均海面標高）による。

（3）挿図の縮尺は図に示すとおりである。また、写真図版における遺物の縮尺は統一していない。

（4）出土遺物番号は、本文・観察表・挿図・写真図版に対応する。

（5）遺構名の略号は以下のとおりである。
掘立柱建物（ＳＢ）、溝（ＳＤ）、小穴（ＳＰ）

10　調査に関する記録と出土遺物は、野々市町教育委員会が一括して保存・管理している。

目　　次

第１章　経　過 …… 1
第１節　調査の経過 …… 1
第２節　発掘作業の経過 …… 1
第３節　整理作業の経過 …… 1

第２章　位置と環境 …… 3
第１節　地理的環境 …… 3
第２節　歴史的環境 …… 3

第３章　調査の方法と成果 …… 6
第１節　調査の方法 …… 6
第２節　層　序 …… 6
第３節　遺構と遺物 …… 6

遺物観察表 …… 14

第４章　総　括 …… 15

写真図版

挿 図 目 次

第１図　調査区配置図 (1/2000) …… 2
第２図　グリッド杭配置図 (1/500) …… 2
第３図　遺跡の位置 …… 3
第４図　野々市町遺跡地図 (1/25000) …… 5
第５図　基本層序 …… 6
第６図　調査区全体図 (1/300) …… 9
第７図　遺構全体図 (1/150) …… 10
第８図　SD-1 遺構実測図 (1/60) …… 11
第９図　SD-1a・2a・2b 土層断面図 (1/40) …… 12
第 10 図　遺物実測図 (1/3) …… 13

表　目　次

第１表　遺物観察表 …… 14

写真図版目次

写真図版１　１区　遺構 …… 16
写真図版２　２区　遺構 …… 17
写真図版３　出土遺物 …… 18

第1章　経　過

第1節　調査の経過

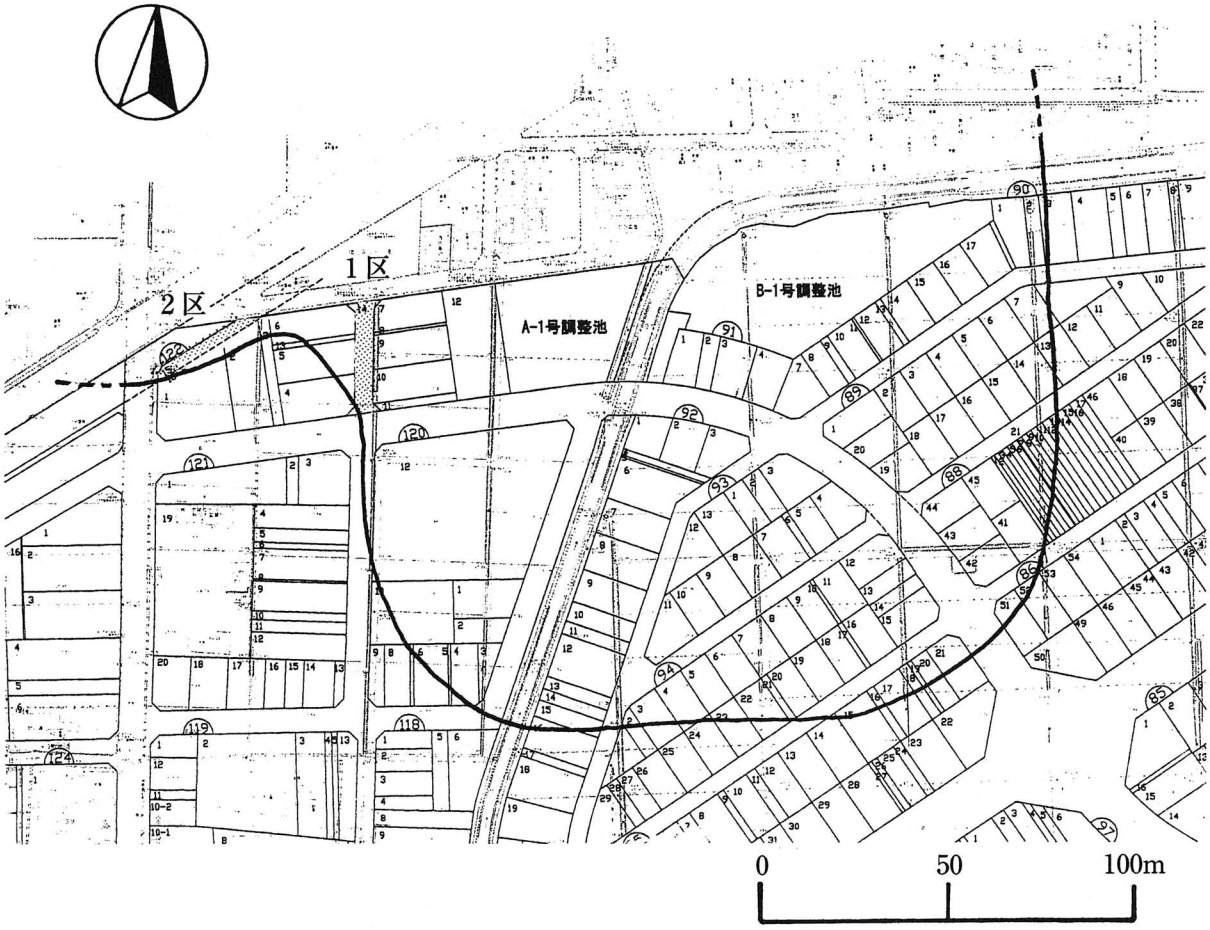
本書に収録の郷クボタ遺跡は野々市町の北西端、白山市横江町と境を接する地点に位置する。周辺は、現在生活環境の向上と宅地化の促進を目的とした野々市町北西部土地区画整理事業が施行中であり、本遺跡もこれに先立ち平成11年度に実施した埋蔵文化財分布調査により新たに発見された遺跡である。当初の分布推定範囲には、今回発掘調査を実施した部分は含まれていなかったが、北陸新幹線整備事業を契機として石川県教育委員会が平成20年度に行った、工事により影響を受ける部分の埋蔵文化財分布調査によって、本遺跡が僅かに北西側に延伸することが確認され、当該地において埋蔵文化財緊急発掘調査を実施する必要が生じた。折しも、野々市町教育委員会が平成20年度にこの隣接地において区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査を行っており、遺跡の性格及び内容を熟知しているということから、県教育委員会文化財課より本調査を野々市町教育委員会で担当できないかという旨の打診があった。町教育委員会としては、次年度の調査予定地がすでに決定した後のことであり、その対応に苦慮したが、なんとかスケジュールを調整して担当することで合意し、平成21年4月1日付け教文第34号で県教育委員会教育長より正式に依頼文書の提出があった。これを受けて、同年4月10日付け教文第16号で町教育委員会教育長より県教育委員会教育長へ宛てて受諾する旨の回答を提出している。事業主体である独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構大阪支社との協議も同時進行で行っており、同年4月1日付け鉄運大支用一第3号で鉄道建設本部大阪支社長より町教育長へ宛てて発掘調査依頼が提出され、4月22日付け教文第28号で町教育長より実施計画書を提出している。その後、同年5月1日付けで受委託契約を締結し、8月4日より現地作業に着手した。

第2節　発掘作業の経過

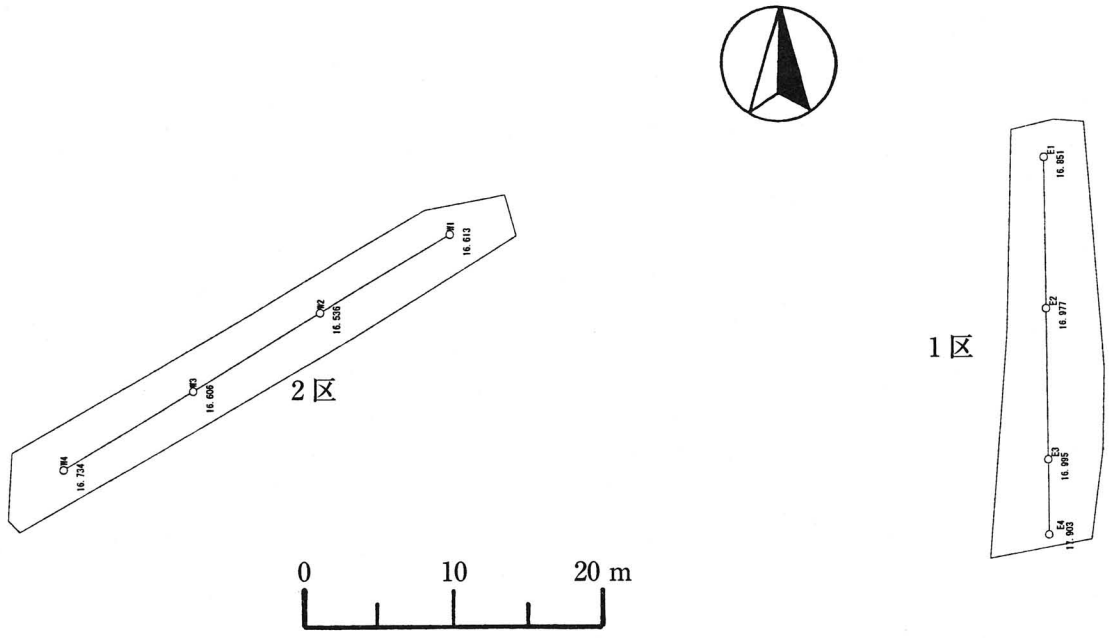
現地調査は8月4日より大型重機による包含層までの土の掘削を開始し、同7日に終了している。作業員による人力作業は、担当者が先行して行っていた区画整理関係の調査終了を待って、8月18日（火）より開始し、まず調査区周辺の草刈りとトレンチ壁の修正、調査環境整備を行った。その後、1区より包含層の掘り下げを行い、20日（木）より遺構検出・同掘進を開始した。掘立柱建物と区画溝以外は土を多く排出する遺構が存在しなかったため、24日（月）には2区の包含層掘り下げに着手し、25日（火）午後には遺構検出・同掘進を開始し、28日（金）には1・2区の遺構清掃を終了し、写真撮影後機材等の洗浄･撤収を行った。その後9月3日（木）からは遺構等の実測作業を開始し､8日（火）にレベル記録までを完了、埋め戻しを行い9月24日付け教文第314号で町教育長より鉄道建設本部大阪支社長へ宛てて完了報告書を提出している。

第3節　整理作業の経過

調査において出土した遺物及び得られた記録の整理作業及び報告書作成作業は、平成22年5月6日付けで受委託契約を締結し、整理作業については同年11月24日（水）から平成23年2月2日（水）にかけて臨時職員1名が担当した。また、報告書の作成作業は町の文化財担当職員1名が担当し、同年2月に刊行した。



第１図　調査区配置図（アミ掛部分が今回調査区、太実線は遺跡推定範囲　S=1/2000）



第２図　グリッド杭配置図（S=1/500）

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　位置と地理的環境

石川県野々市町は、南北に長く続く県土のほぼ中央に位置し、町域の多くは県下最大の河川である手取川によって形成された広大な手取川扇状地北東部にあたる。手取川扇状地は、標高約 80m を測る白山市鶴来を扇頂とし、扇径約 12km、展開度約 120 度の規模を有する。近世加賀百万石を支えた石川平野の中心として多くの生命を育んできた地域であるが、古くは網の目状に氾濫する河川が造作した大小無数の小谷により、放射状に連なる細長い島状微高地を多く地下に内包することがこれまでの発掘調査成果により確認されている。その名残といわれているのが、現在も広大に広がる耕地を潤す富樫・郷・山島・大慶寺・中島・新砂川の七ヶ用水であり、郷地区はこのうちの郷用水水系下流域にあたる。北東側を金沢市に、南西側を白山市に接する当町は、古来交通の要地、商都として開かれた。近世以降昭和前半期にあっては、金沢市近郊の長閑な農村風景を呈していたが、近年の相次ぐ土地区画整理事業等の施行と、それに伴う郊外型大型店舗の進出や人口増加により町域の景観は大きく変貌を遂げており、５万人都市として市制の施行も目前に迫っている。

第３図　遺跡の位置

郷クボタ遺跡は、この野々市町の北西側、郷町地内に所在し、標高 17m 前後を測る手取川扇状地扇端部にあたる。南東側を交通の大動脈である国道８号が走っており、区画整理事業の進展に伴う大型店舗の建設や良質な住宅地の供給などと併せ、周辺は調査終了後わずか数年で近代的な都市景観へ生まれ変わろうとしている。

第２節　歴史的環境

手取川扇状地扇央部における縄文時代の遺跡分布は極めて希薄であり、該期にまで遡る遺跡は現状で確認されている限り白山市に所在する晩期後半の長竹遺跡と、同様の遺物が出土し、配石遺構や埋甕を伴う乾遺跡の二例のみである。反面、当遺跡が位置する扇端部や金沢市西部に広がる沖積低地に目を向けると、野々市町に所在する御経塚遺跡をはじめとして新保チカモリ遺跡や中屋遺跡、米泉遺跡など周辺の中核ともいうべき大きな集落が長期間にわたって展開している。これは、後者が標高６～10 m前後に立地し、扇状地を伏流する地下水の自然湧水域にあたることに加え、小河川により形成された微高地と低地が交互に入り組んだ地形により、一帯が植物・動物質食料や暮らしに必要な材料の供給源である落葉広葉樹と照葉樹が混合する豊かな森を形成していたことに起因すると考えられる。

弥生時代に入ると、周辺のみならず全県規模で遺跡の確認数は減少する。前期については周辺では御経塚遺跡や押野タチナカ遺跡、三日市Ａ遺跡などで遺物が確認されているが、そのほとんどが遺構等の明確な実態を伴わない、極めて少量の出土にとどまっており、前段の集落の大きな広がりとは対照的である。中期に入ってもこの傾向は変わらず、周辺での確認例は遺構・遺物ともに皆無に等しく、町域では扇端部に位置する押野大塚遺跡と御経塚遺跡ツカダ地区でわずかに認められる程度である。これに対して、後期後半以降になると確認されている遺跡の数は飛躍的に増加する。このことは、鉄器の普及や農業技術の進歩による生産力の向上から人口が増加したことを如実に示しており、人口密

度過多の解消や安定した生活環境を維持するために、新たな耕作地を求めて中・小規模の集落が周囲に分散していったものと考えられる。この時期の代表的な遺跡として、周辺では御経塚遺跡群や二日市・三日市遺跡群、高橋川の自然堤防上に連なる遺跡群など枚挙に暇がないが、注目すべきは御経塚シンデン遺跡や二日市イシバチ遺跡、横川・本町遺跡や白山市旭遺跡群など続く古墳時代初頭において古墳群を造営しうる勢力が醸成されはじめたことである。しかし、その後の展開は弥生時代にみられた状況とよく似ており、古墳時代中期後半の集落跡として御経塚遺跡に若干の痕跡がみられる程度であり、再び歴史的な空白期を迎えることとなる。

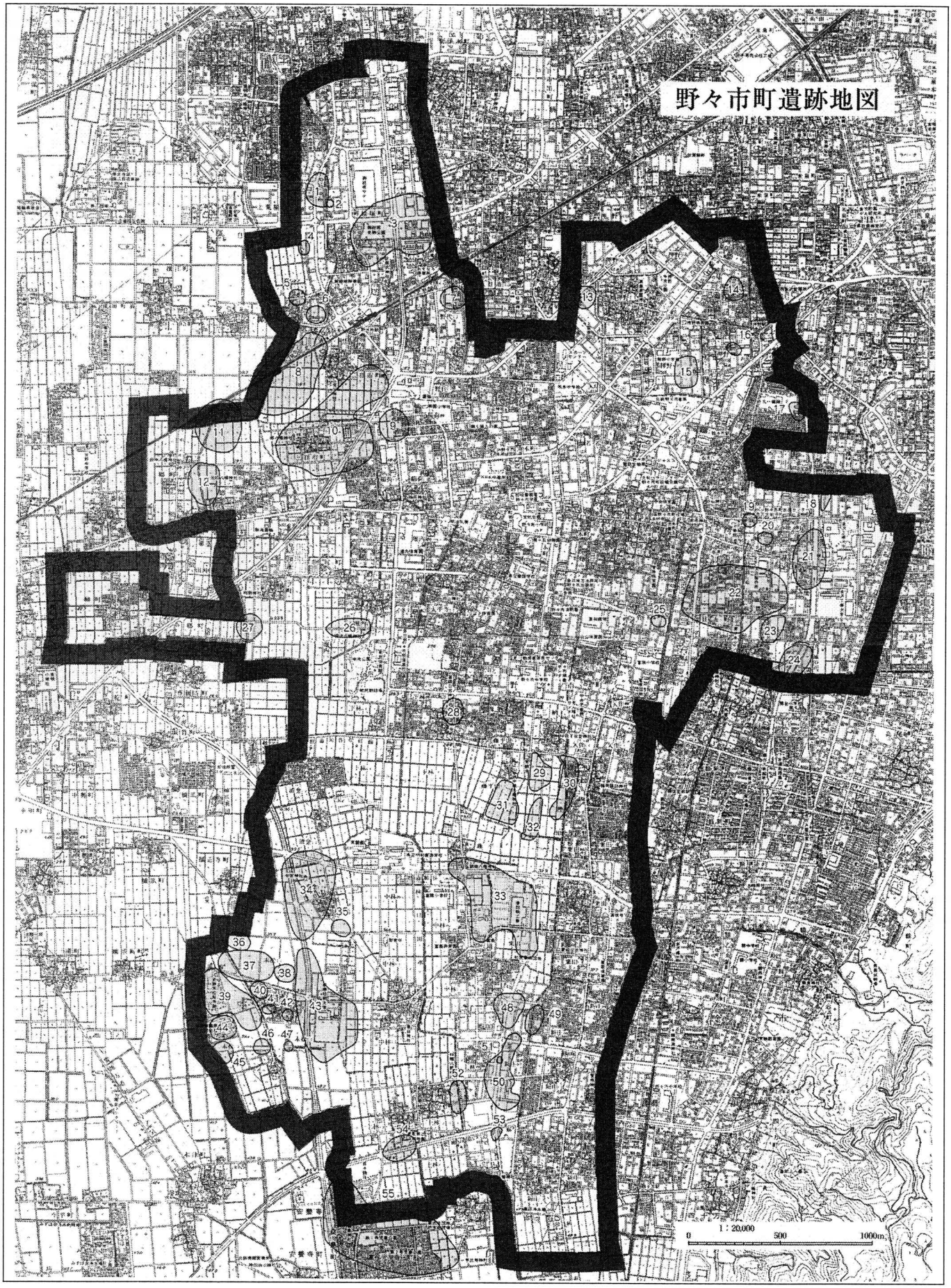
その後、7世紀代以降より手取扇状地の扇央部において集落の萌芽・拡大がみられることはこれまでも知られていたが、8世紀代に入るとこれまで当該期の遺跡は希薄と考えられていた扇状地扇端部でも、最近の発掘調査成果から古代の集落跡が存在することが明らかになってきた。縄文時代から中世にわたる広大な野々市町三日市A遺跡では、平成15年度に古代の官道である北陸道と思われる道路状遺構が確認され、その後の調査で延長約530mの区間で直線的に伸びる姿が復元される。また、それに呼応するように沿線でも8世紀前半から9世紀後半代の集落跡確認例が増加している。

8世紀後半以降、周辺での遺跡確認数は更に増加し、古代集落の動向上ひとつのピークをなす。扇端部及び沖積低地では上荒屋遺跡や横江庄遺跡といった初期荘園関連の遺跡が開始され、前段より継続するものも更に内容を充実させる。

中世の集落に関しては、町域でも旧来の集落に重複もしくは隣接する例が多く、その成立時期を知る手掛かりとなっている。このような中、野々市町の本町地区においては、平成6年度に加賀国司であった富樫氏の館跡内堀の調査が実施され、該期の土器類とともに手鏡1点が出土している。その他、町内では粟田遺跡や三納ニシヨサ遺跡、三納トヘイダゴシ遺跡などが島状微高地上に連なるように広がっており、当時の散居村的な景観を思わせる。また、扇端部では現在の二日市集落南側に広がる三日市A遺跡北ブロックで大きな堀割や大量の井戸を持つ館跡と五輪塔を多出した方形台状の墓域などが確認されており、やはり有力な領主層の存在を覗わせる。同様のことは三日市町・徳用町においても確認されており、やはり旧来の集落に近接して中世の居館・集落が検出されている。特に徳用クヤダ遺跡では、中世の北国街道が南側至近を走っており、陶磁器類や石造遺物に上質なものが多く認められる。

野々市町と周辺の遺跡

1 御経塚シンデン遺跡・御経塚シンデン古墳群
2 御経塚経塚
3 御経塚遺跡
4 御経塚オッソ遺跡
5 長池ニシタンボ遺跡
6 長池キタノハシ遺跡
7 野代遺跡
8 二日市イシバチ遺跡
9 三日市ヒガシタンボ遺跡
10 三日市A遺跡
11 郷クボタ遺跡
12 徳用クヤダ遺跡
13 上宮寺跡
14 押野大塚遺跡
15 押野タチナカ遺跡・押野館跡
16 押野ウマワタリ遺跡
17 横川・本町遺跡
18 高橋セボネ遺跡
19 山川館跡
20 高橋ウバガタ遺跡
21 扇が丘ゴショ遺跡
22 富樫館跡
23 扇が丘ヤグラダ遺跡
24 扇が丘ハワイゴク遺跡
25 菅原キツネヤブ遺跡
26 堀内館跡
27 田中ノダ遺跡
28 三林館跡
29 三納トヘイダゴシ遺跡
30 三納アラミヤ遺跡
31 藤平田ナカシンギジ遺跡
32 三納ニシヨサ遺跡
33 粟田遺跡
34 清金アガトウ遺跡
35 末松信濃館跡
36 末松福正寺遺跡・福正寺跡
37 末松ダイカン遺跡
38 末松B遺跡
39 末松廃寺跡
40 古元堂館跡
41 末松C遺跡
42 末松古墳
43 末松A遺跡
44 大館館跡
45 末松砦跡
46 法福寺跡
47 末松しりわん遺跡
48 下新庄アラチ遺跡
49 下新庄タナカダ遺跡
50 上林新庄遺跡
51 上林古墳
52 上林テラダ遺跡
53 上新庄ニシウラ遺跡
54 上林遺跡
55 安養寺遺跡
56 上荒屋遺跡
57 横江館跡
58 額新町遺跡



第４図　野々市町遺跡地図（S=1/25000）

第３章　調査の方法と成果

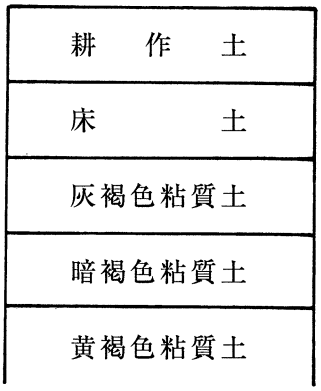
第１節　調査の方法

現地調査を行うにあたり、まず調査対象地の縄張り設定を行い、大型掘削機を用いて遺物包含層上面までの土砂を除去し、代替道路建設部分を１区、線路高架橋建設部分を２区と呼称することに決定した。掘削作業終了後、グリッド杭の設定を行ったが、今回の調査区は狭長であり、特に２区において方位に対して著しく傾いているため、座標の整数値の交点を用いて直線的に結べるよう配慮した。その後、人力による本格的な発掘調査を行った。作業の内容は、調査区ごとに移植ゴテを用いて包含層を遺構検出面まで掘り下げ、その後精査を行い遺構検出作業に入った。遺構検出作業終了後、遺構略測図を作成し、写真撮影を行った後に慎重に遺構掘削作業を行い、平行して掘り上がった遺構の土層断面図を作成した。すべての遺構掘削が終了した後、調査区全体の清掃作業を行った上で写真撮影を行っている。その後、委託作業として遺構測量を実施し、現地での調査を終了した。

整理作業については、出土した遺物の洗浄、記名、接合を行い、残りの良いものを選んで実測図作成、トレースまでを行い、併せて現地で作成した遺構図のトレース・編集作業を実施した。これらの作業が完了した後に報告書の執筆、図面･現場写真のレイアウト、遺物写真撮影等を行い報告書を刊行した。報告書中の遺構・遺物図版の縮尺についてはすべて図中に示したとおりである。

第２節　層　序

基本的な層序については、第５図に示したとおりであり、遺構検出面を含めて概ね５層からなる。第１層は現耕作土であり、第２層は床土である。これら２層の客土で平均20cmを測る。第３層は灰褐色を呈する粘質土であり、中世段階の包含層と考えられる。重機を用いた掘削では、この第３層上面までの土を除去しており、以下は移植ゴテを用いた人力掘削を行っている。第４層は古代の包含層と思われる暗褐色を呈する粘質土であり、部分的に確認されない地点がある。断面でみれば比較的土色の差異がわかりやすいが、面的には難しく、第４層上面での中世遺構の検出は断念した。第５層は遺構検出面もしくは地山であり、黄褐色を呈する粘質土である。これより下は同種の土に礫を含むようになる。



第５図　基本層序

第３節　遺構と遺物

今回の調査区で確認された遺構は、古代及び中世のものが主体であるが、遺跡推定地の縁辺にあたると考えられることからその密度が薄く、明確に性格を推定できるものは少ない。以下では、遺物の出土した遺構を中心に説明を加える。

・ＳＢ－１（第７・８図）

１区北側に位置する桁行10.88mを測る南北棟の掘立柱建物であり、軸方位Ｎ－７°Ｗである。柱穴は大きいもので南北128cm、東西116cm、深さ91cmを測り、小さいものでは南北96cm、東西108cm、深さ84cmを測る。柱間は北より226cm－202cm－204cm－212cm－244cm（いずれも芯－芯）となり、平成20年度に実施した東側隣接地の調査でこの建物は５×３間の規模であることが確認されており、床面積は67㎡ほどが推定できる。遺物は出土していないが、平成20年度の調査結果から９世紀中頃の年代が与えられる。

・ＳＰ－１（第７図、遺物図版第10図、以下同じ）

１区ＡＸ６グリッドに位置する長径73cm、短径49cm、深さ25cmを測る小穴である。性格は不明。遺物は須恵器坏（1）が１点出土している。

・ＳＰ－２（第７図）

１区ＡＸ５グリッドに位置する径28cm、深さ24cmを測る小穴であり、ＳＤ－３を切っている。性格は不明。遺物は須恵器瓶類の胴部小片が出土している。

・ＳＰ－３（第７図）

１区ＡＸ５グリッドに位置する長径48cm、短径46cmを測る小穴であり、深さはテラス部で16cm、最深部で27cmを測る。性格は不明。遺物は土師器小甕の胴部小片がある。

・ＳＰ－４（第７図）

１区ＡＸ５グリッドに位置する径30cm、深さ25cmを測る小穴である。これより北側に同様の小穴が柵列のように並ぶが、間隔や深さがまちまちであり、判然としない。遺物は土師器埦と思われる体部小片がある。

・ＳＰ－５（第７図）

１区ＡＸ５グリッドに位置する長径33cm、短径24cm、深さ18cmを測る小穴である。性格は不明。遺物は須恵器坏の体部小片がある。

・ＳＰ－６（第７図）

１区ＡＸ４グリッドに位置する長径36cm、短径34cm、深さ40cmを測る小穴である。性格は不明。遺物は器種不明の土師器小片がある。

・ＳＰ－７（第７図）

１区ＡＸ４グリッドに位置する長径推定で67cm、短径50cm、深さ32cmを測る小穴である。性格は不明。遺物は須恵器盤（2）のほか土師器小片などが出土している。

・ＳＰ－８（第７図）

１区ＡＸ４グリッドに位置する径49cm、深さ70cmを測る小穴である。ＳＢ－１の柱穴に切られているが、比較的良好な深さを保つ。遺物は土師器小甕の胴部小片などが出土している。

・ＳＰ－９（第７図）

１区ＡＸ４グリッドに位置する径38cm、深さ50cmを測る小穴である。南に位置するＳＰ－８及びさらに南に位置する小穴とあわせ、３穴並ぶかのようにもみえるが判然としない。遺物は須恵器坏(3)と土師器埦の底部小片（4）のほかに器種不明の土師器小片がある。

・ＳＰ－10（第７図）

２区ＢＣ５グリッドに位置する長径49cm、短径35cmを測る小穴であり、深さはテラス部で10cm、最深部で17cmを測る。性格は不明。遺物は器種不明の土師器小片がある。

・ＳＰ－11（第７図）

２区ＢＣ５グリッドに位置する一辺73cm、深さ5cmを測る略方形を呈する浅い小穴である。性格は不明。遺物は須恵器有台坏（5）の小片がある。

・ＳＤ－１ａ、ＳＤ－１ｂ（第７・９図）

１区・２区にわたって東西に直線的に伸びる溝であり、平成20年度の調査成果から全長約80ｍ

が確認されているが、これより東側は白山市地内に伸びて行く。上面幅110～160cm以上、底面幅72～88cm、深さ50～55cmを測る断面台形状を呈し、2区では幅84cm、段差15cmほどのテラス面を持つ。遺物は6～9のほか珠洲焼、越前焼の胴部小片などが出土している。

・SD－2a、SD－2b（第7・9図）

同じく1区・2区にわたって東西に伸びる溝である。一見して前出のSD－1a・SD－1bと幅約160cmほどを保って並行するようにみえるが、東側隣接地の調査では東へ約20mの地点で交差しており、こちらの方が新しいことが確認されている。この溝はさらに東へ延伸し、平成19年度の調査とあわせ全長約125mが確認されているが、これより東側は安原川の流路と重なるためどこまで伸びるのかは不明である。上面幅170～277cm、底面幅24～100cm、深さ75cm前後を測り、2区においては北側に1段もしくは2段のテラス面を持つ。1区の方が2区よりも遺構検出面の標高が30cmほど高く、深さ（比高）自身はまちまちであるが、溝底レベルは確実に両溝ともに西へ向けて下がっている。遺物は本調査区では最も出土量が多く、10～16のほか珠洲焼、越前焼の胴部小片などが出土している。図化のかなうものは少なく、図上では古代が多い印象を受けるが、平成20年度の調査結果からSD－1、2ともに15世紀代に帰属することがわかっている。

・SD－3（第7図）

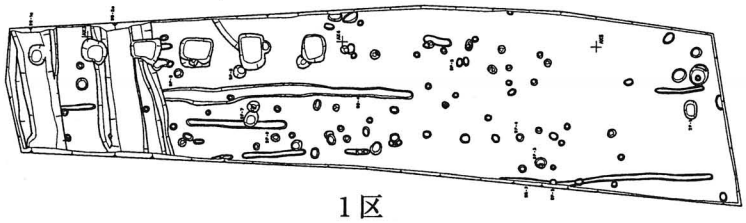
1区南端に位置する検出長8.44m、幅24cm、深さ10cm前後を測る小溝である。性格は不明。遺物は外面赤彩・内面黒色の土師器埦（17）が出土している。

・SD－4（第7図）

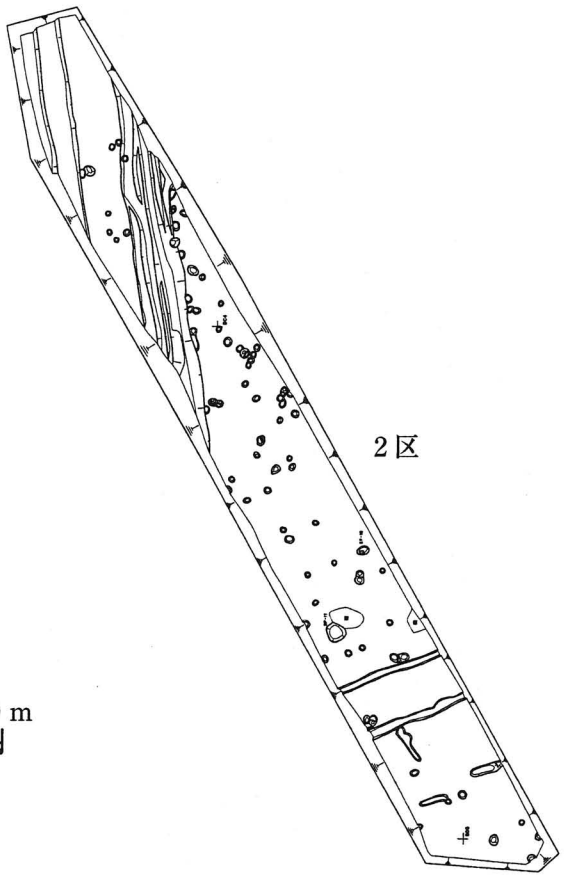
1区ほぼ中央に位置する長さ9.84m、幅最大で63cm、深さ10cm前後の南北溝であり、北端でSD－2aに切られている。性格は同じく不明。遺物は器種不明の須恵器小片2点が出土している。

・包含層

1区より出土した18～25と2区から出土した26がある。総じて1区からの出土量が多く、2区については遺跡推定範囲の縁辺であることを物語っている。図化できたものは古代が多いが、中世に帰属するものは甕、鉢類の胴部片が多く図化することはかなわかった。



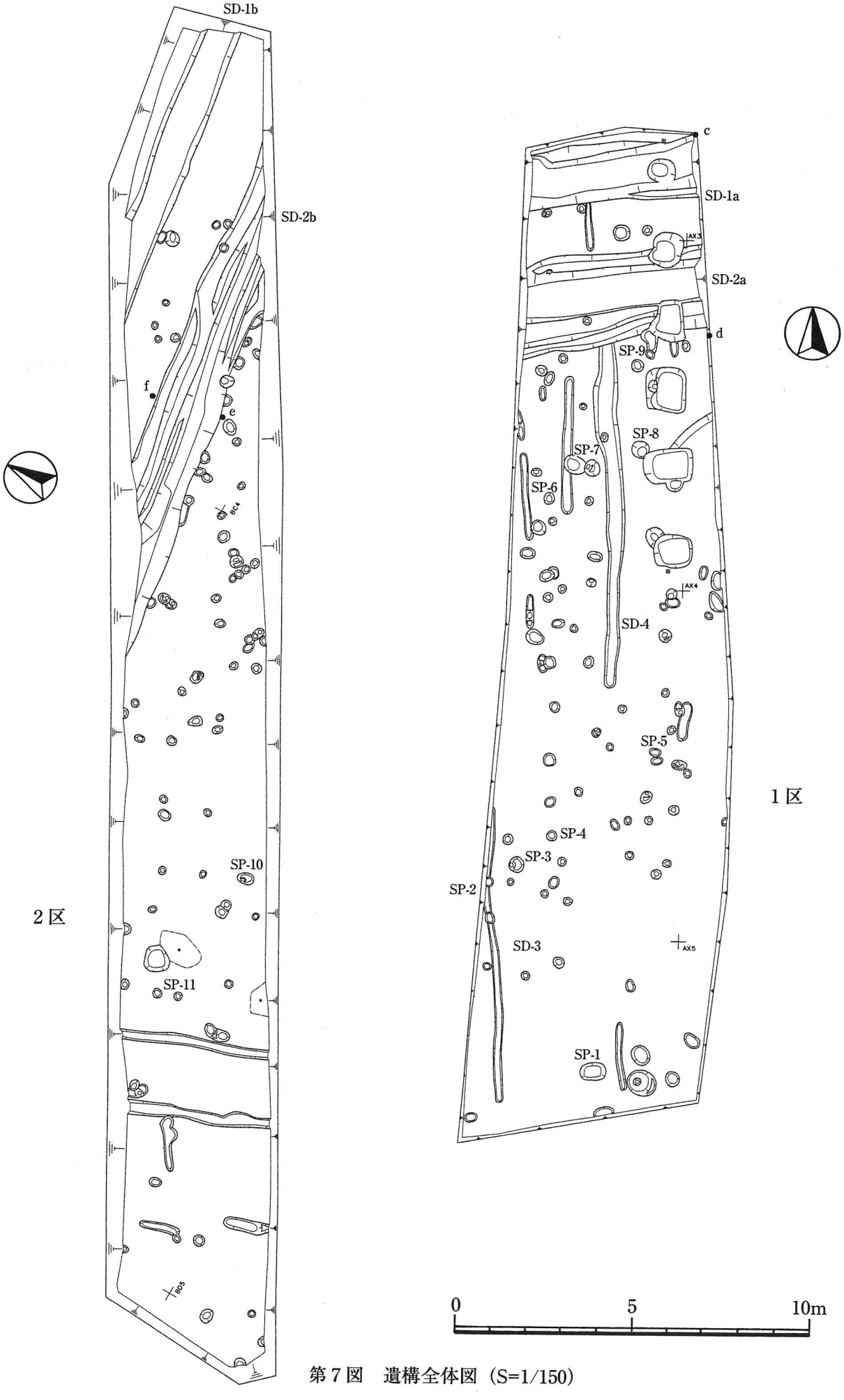
1区



2区

0　　5　　10 m

第6図　調査区全体図（S=1/300）



第7図　遺構全体図（S=1/150）

1　淡灰褐色粘質土
2　褐灰色粘質土
3　暗褐色粘質土
4　暗灰褐色粘質土
5　暗灰色粘質土
6　淡黄色粘質土

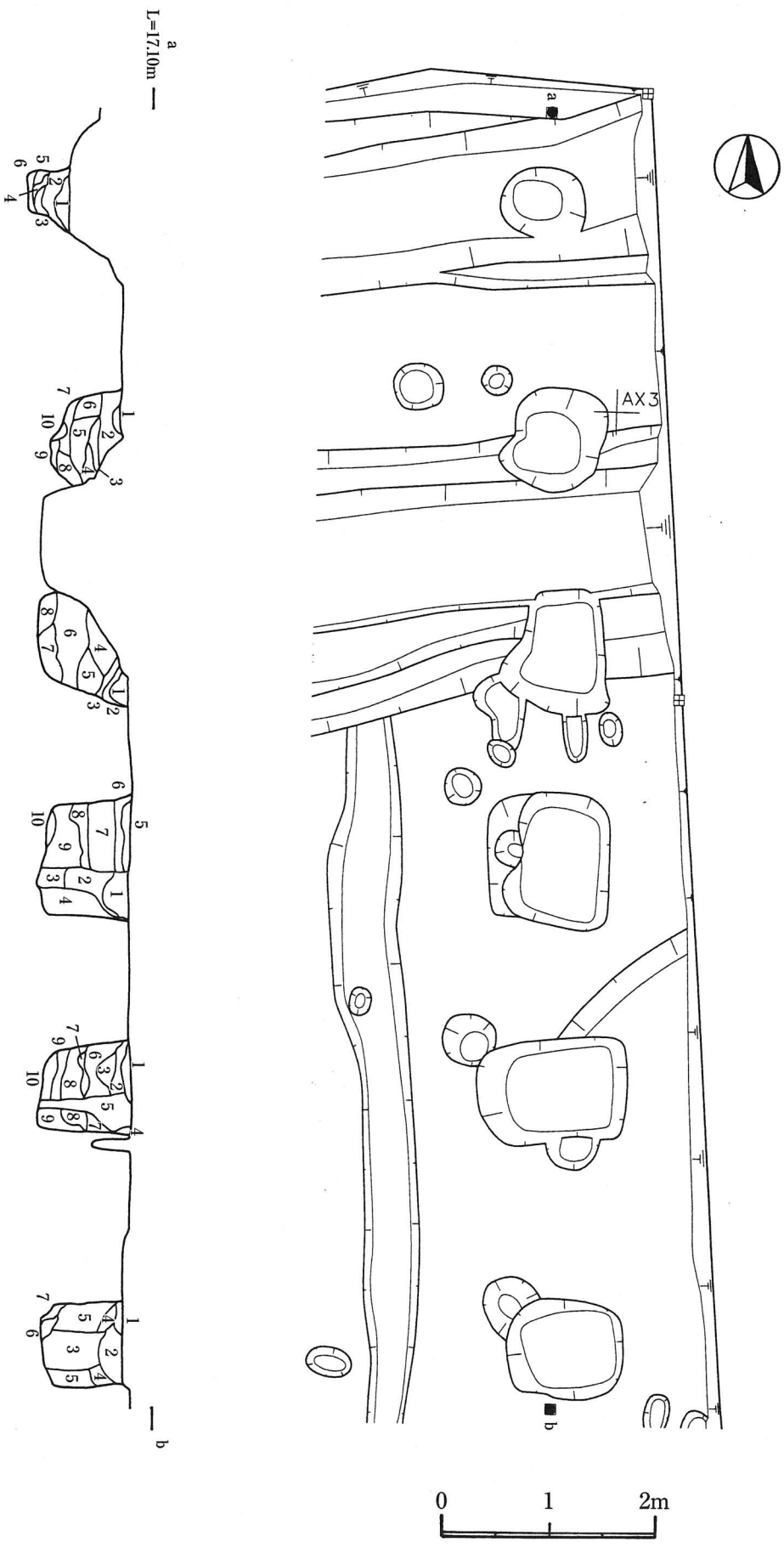
1　淡灰褐色砂質土
2　褐色粘質土
3　暗灰褐色粘質土
4　暗灰色粘質土
5　灰褐色粘質土（やや暗い）
6　灰色粘質土
7　褐灰色粘質土
8　暗灰色粘質土（やや淡い）
9　暗灰色粘質土
10　淡黄色粘質土

1　暗褐色粘質土
2　褐色粘質土
3　褐灰色粘質土（黄色粒含む）
4　褐灰色粘質土
5　暗褐色粘質土
6　淡灰色粘砂質土
7　暗灰褐色粘質土
8　暗褐色粘質土

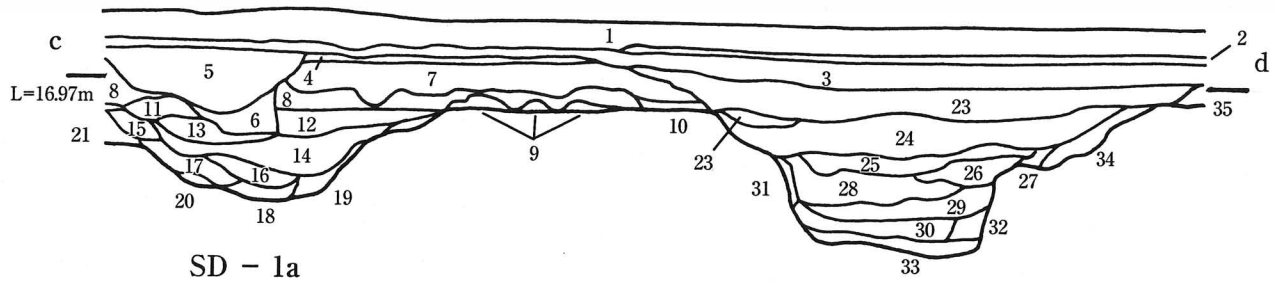
1　褐色粘質土
2　褐灰色粘質土
3　暗褐色粘質土
4　暗灰褐色粘質土
5　暗褐灰色粘質土
6　暗褐色粘質土
7　暗灰色粘質土
8　暗灰褐色粘質土
9　暗灰色粘質土
10　褐灰色粘質土

1　褐色粘質土
2　褐灰色粘質土
3　褐色粘質土
4　暗灰褐色粘質土（中世ピット）
5　褐色粘質土
6　暗褐灰色粘質土
7　褐灰色粘質土
8　暗褐灰色粘質土
9　暗灰褐色粘質土
10　褐灰色粘質土（やや暗い）

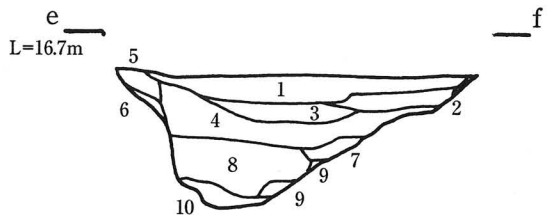
1　褐灰色粘質土
2　褐色粘質土
3　暗褐灰色粘質土
4　褐灰色粘質土（黄色ブロック含む）
5　褐灰色粘質土
6　暗灰褐色粘質土
7　淡黄褐色粘質土



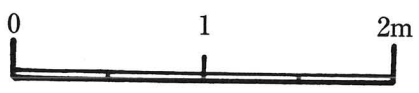
第8図　SB－1遺構実測図（S=1/60）



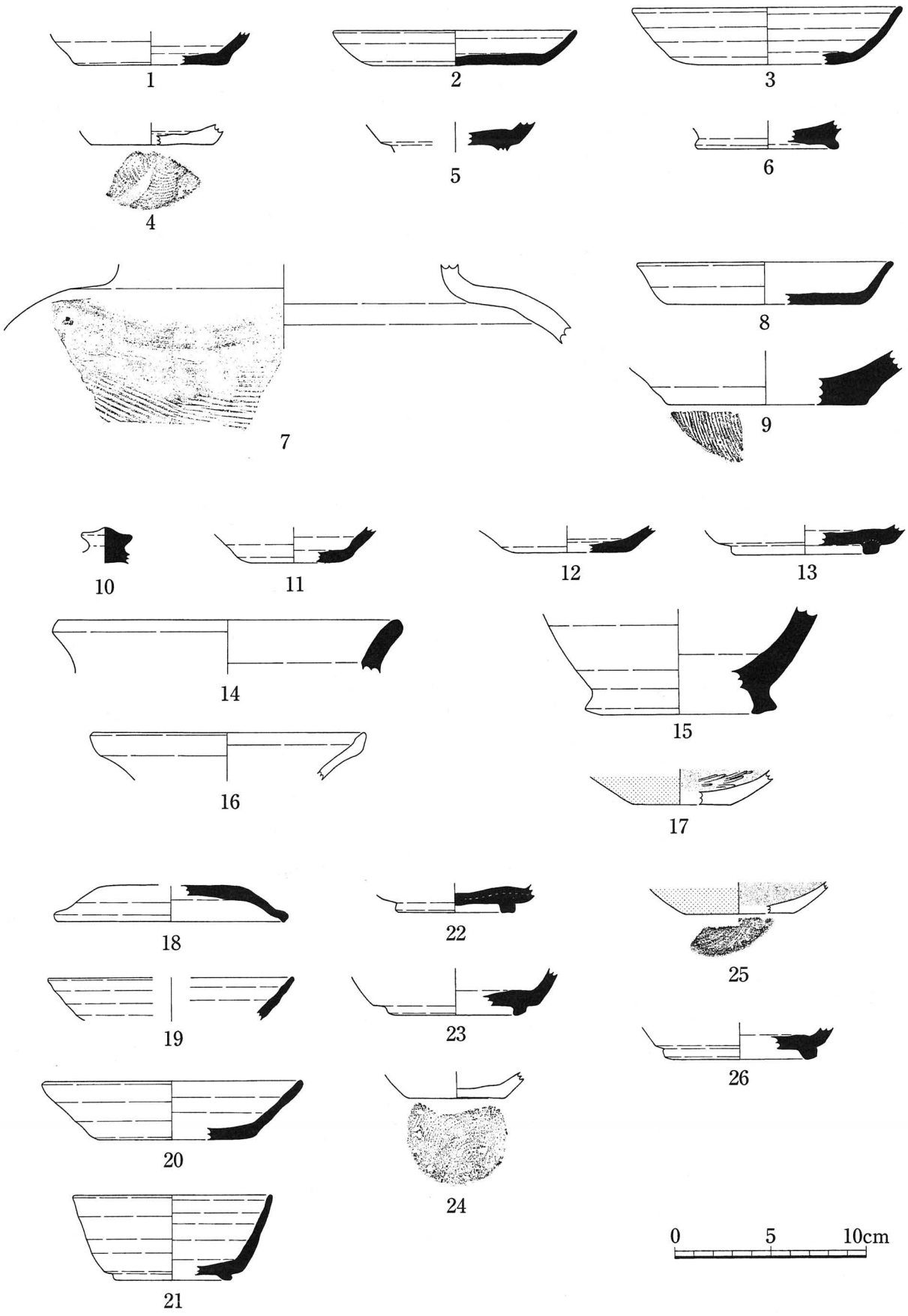
1 耕作土
2 床土
3 褐灰色粘質土
4 暗灰褐色粘質土
5 灰色粘質土
6 褐灰色粘質土
7 褐色粘質土＋褐白色流砂
8 褐色粘質土（やや暗い）
9 淡黄褐色粘質土
10 黄褐色粘質土
11 褐色粘質土（やや淡い）
12 褐灰色粘質土
13 濁暗灰色粘質土
14 褐灰色粘質土
15 暗灰褐色粘質土
16 灰褐色粘質土
17 暗灰色粘質土（やや淡い）
18 淡灰褐色粘質土
19 灰褐色粘質土
20 黄灰色粘質土（やや暗い）
21 濁黄橙色粘質土
22 褐灰色粘質土
23 褐灰色粘質土（やや明るい）
24 褐色粘質土
25 褐色粘質土（やや暗い）
26 灰褐色粘質土
27 濁淡黄色粘質土
28 淡褐色粘質土
29 灰白色粘土
30 灰色粘土
31 淡黄灰色粘質土
32 褐色粘質土
33 灰色粘土（やや暗い）
34 暗灰褐色粘質土
35 暗黄褐色粘質土



1 褐灰色粘質土
2 褐灰色粘質土（流砂含む）
3 灰褐色粘質土（やや暗い）
4 淡褐灰色粘質土
5 褐灰色粘質土
6 淡黄褐色粘質土
7 灰色強粘質土
8 淡灰色粘土
9 淡黄灰色粘質土
10 黄灰色強粘質土（やや暗い）



第９図　SD － 1a・2a・2b 土層断面図（S=1/40）



第10　図　遺物実測図（S=1/3）

SP－1（1）、SP－7（2）、SP－9（3・4）、SP－11（5）
SD－1a（6・7）、SD－1b（8・9）、SD－2a（10～14）、SD－2b（15・16）
SD－3（17）、1区包含層（18～25）、2区包含層（26）

第1表　遺物観察表

図版 No.	実測 No.	出土地点	遺構 No.	種類	器種	口径 (mm)	底径 (mm)	器高 (mm)	残存率	色　調	備　考
1	M－14	1区	SP－1	須恵器	坏		80		1/6	灰白色	
2	M－15	1区	SP－7	須恵器	盤	129	91	19	1/6	灰／黄灰色	Ⅵ1～2
3	M－17	1区	SP－9	須恵器	坏	142	87	30	1/4	灰色	Ⅵ1～2
4	M－16	1区	SP－9	土師器	埦		66		1/4	にぶい橙褐色	外面煤付着
5	M－18	2区	SP－11	須恵器	有台坏				小片	灰色	
6	M－1	1区	SD－1a	須恵器	有台坏		74		1/5	黄灰色	
7	M－2	1区	SD－1a	珠洲	中甕				1/6	灰色	
8	M－10	2区	SD－1b	須恵器	盤	134	100	23	1/4	灰白色	Ⅳ2（古）
9	M－11	2区	SD－1b	珠洲	片口鉢		105		1/7	灰色	焼成不良
10	M－3	1区	SD－2a	須恵器	坏蓋				完	灰褐色	Ⅳ2（古）
11	M－6	1区	SD－2a	須恵器	坏		60		1/4	灰白色	焼成不良
12	M－7	1区	SD－2a	須恵器	坏		65		1/4		焼成不良
13	M－8	1区	SD－2a	須恵器	有台坏		76		1/4	灰色	Ⅵ2
14	M－5	1区	SD－2a	須恵器	壷	177			1/8	褐灰色	Ⅵ2
15	M－12	2区	SD－2b	須恵器	瓶		101		1/6	灰色	Ⅳ2（新）
16	M－13	2区	SD－2b	土師器	甕				小片	浅黄橙色	
17	M－9	1区	SD－3	土師器	埦		51		1/3	浅黄橙色	外面赤彩・内黒
18	M－19	1区	包含層	須恵器	坏蓋	120			1/7	灰色	Ⅴ2か
19	M－21	1区	包含層	須恵器	坏	(130)			小片	灰色	重焼痕
20	M－25	1区	包含層	須恵器	坏	138	85	31	1/7	灰色	Ⅵ1～2
21	M－24	1区	包含層	須恵器	有台坏	105	45	62	1/4	灰褐色	Ⅴ2か
22	M－22	1区	包含層	須恵器	有台坏		64		1/4	灰色	Ⅵ1
23	M－23	1区	包含層	須恵器	有台坏		74		1/5	黄灰色	Ⅵ1
24	M－26	1区	包含層	土師器	埦		50		3/4	にぶい黄橙色	
25	M－20	1区	包含層	土師器	埦		57		1/4	浅黄橙色	内黒
26	M－27	2区	包含層	須恵器	有台坏		79		1/6	灰色	Ⅵ1～2

第4章　総　括

・古　代

古代の遺構は1区に集中しており、性格の明確なものとして掘立柱建物1棟を確認した。本調査区の成果のみでは遺跡全体の性格までを評価することはできないが、既往の調査結果ではこれより東に大型の掘立柱建物が数棟整然と配置されていたことが知られる。これらの建物群は、ほぼ南北棟（1棟東西棟かと思われる建物も存在するが、詳細な評価はのちに譲る。）で占められており、9世紀中頃に建てられた5×3間もしくは4×2間の建物群が、9世紀末～10世紀初頭にかけて7×2（1）間の長大な建物に建て替えられている。平成20年度の調査で出土した遺物は現在整理中であり、その検討については今後の課題であるが、異様に細長い建物の形態から、厩として利用された可能性も考えられる。本調査区から南へ約500m離れた地点には、平成14年度から同18年度にかけて確認された古代北陸道の推定ラインが走っており、本遺跡は古代の駅家に関連する施設として機能していたのかもしれない。加賀国に置かれた駅家は、当初8駅であったものが10世紀初頭には7駅となったことが当時の記録からも確認されており、おのおのの距離から廃止された1駅は石川郡内にあった可能性が高いと考えられている。これについては諸説あるが、比楽駅と田上駅のほぼ中間地点に位置する本遺跡は、その候補となりうる可能性を持っている。隣接する調査区の検討が十分なされていない今、断定はできないがひとつの可能性として提示しておく。

・中　世

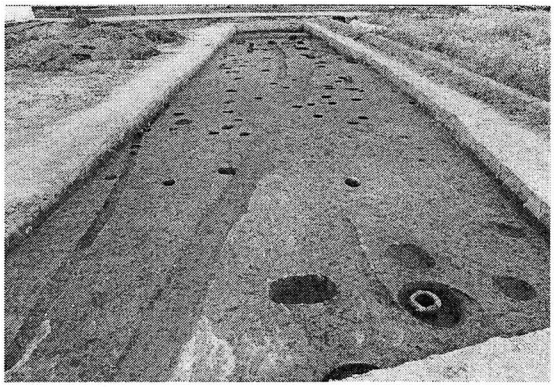
明確に中世に属すると思われる遺構は、調査区北端を東西に伸びる区画溝ＳＤ－１ａ・ｂとＳＤ－２ａ・ｂの2条のみである。図示した遺物では判然としないが、隣接する調査区の同じ溝の底から出土した遺物によって15世紀前半頃を考えている。これより北側は白山市横江町となり、対岸の様相は不明であるが、野々市町内に限っていえば、この東側には同時期から近世初頭まで営まれた土葬・火葬が入り乱れた墓域が広がっており、さらに安原川を越えた本遺跡中心部には、多数の掘立柱建物が展開している。本遺跡のみをみれば、大きな掘割などは確認されていないが、南に位置する徳用クヤダ遺跡では、大きく区画された屋敷地や大型の竪穴状遺構などが確認されており、周辺の領主層の館が存在していたものと思われる。掘立柱建物の規模や、柱穴の掘り方からみて、本遺跡はその領主層の屋敷を取り巻くようにして営まれた一般農民の集落跡であり、本調査区はその北西側縁辺部にあたるものと考えられる。

参考文献

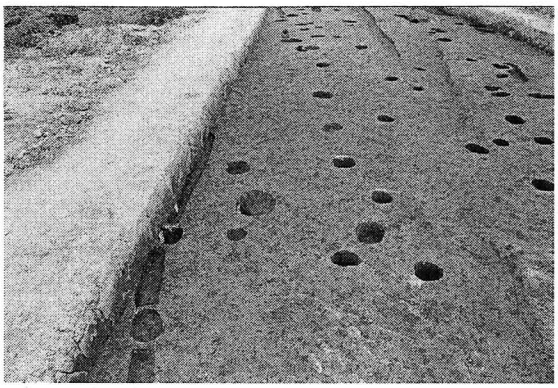
『図説　野々市町の歴史』　野々市町　2005

『野々市町史通史編』　野々市町　2006

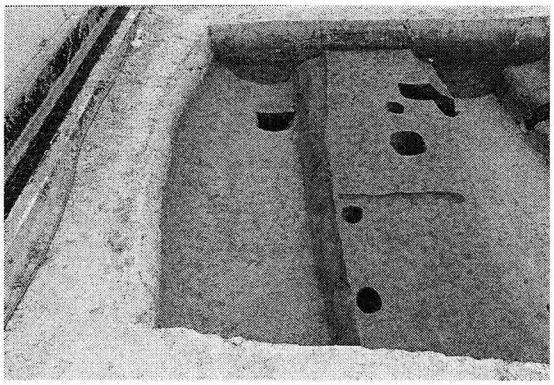
『徳用クヤダ遺跡Ⅰ』　野々市町教育委員会　2009



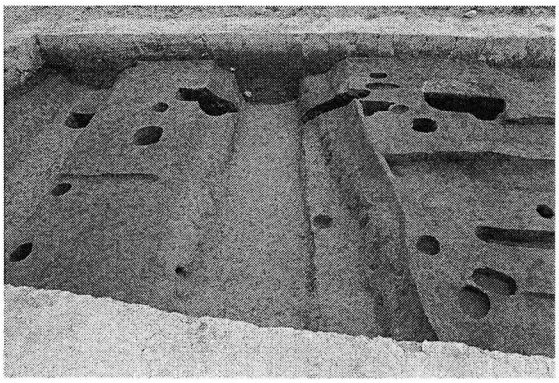
1区　全景（南より）



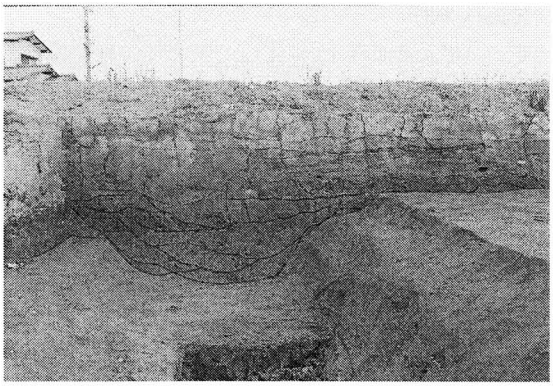
1区　北側遺構完掘状況（南より）



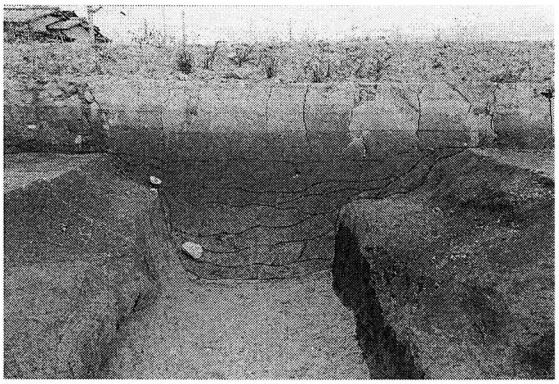
SD－1a　完掘状況（西より）



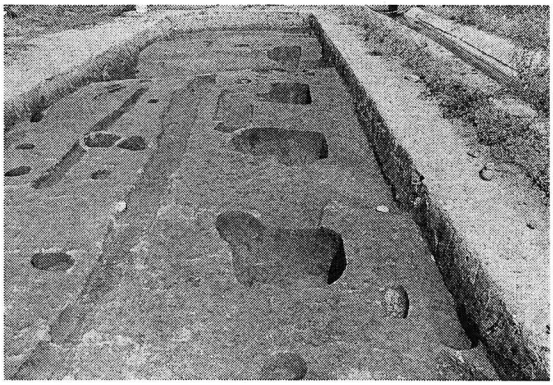
SD－2a　完掘状況（西より）



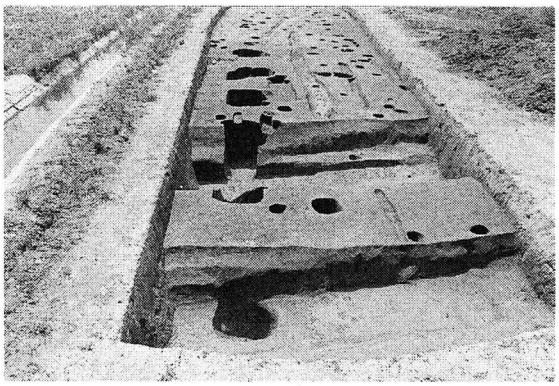
SD－1a　土層断面（西より）



SD－2a　土層断面（西より）

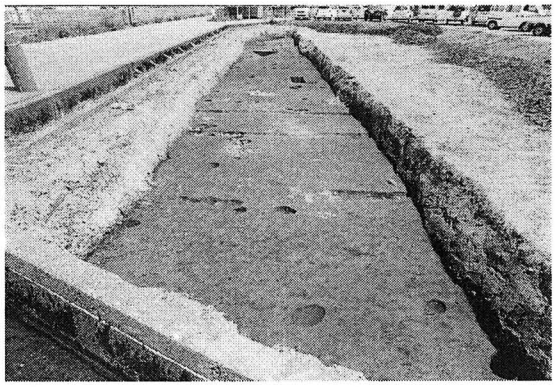


SB－1　完掘状況（南より）

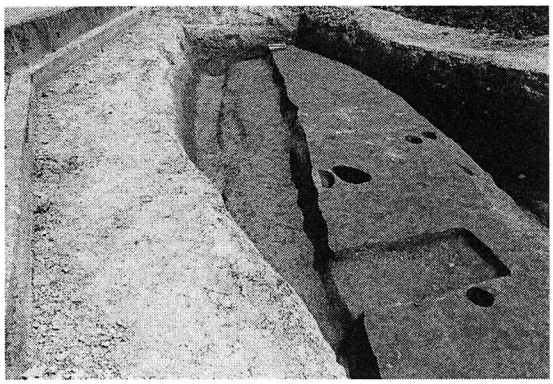


SB－1　完掘状況（北より）

2区　全景（東より）

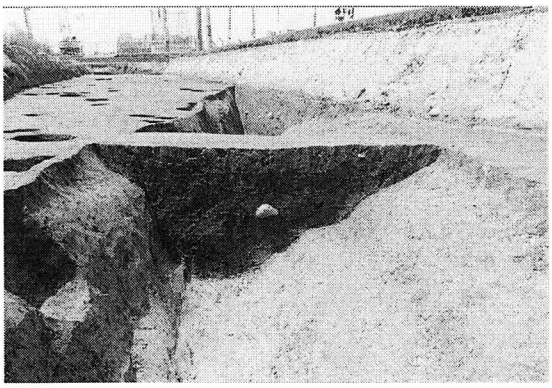


2区　全景（西より）



SD－1b　完掘状況（西より）

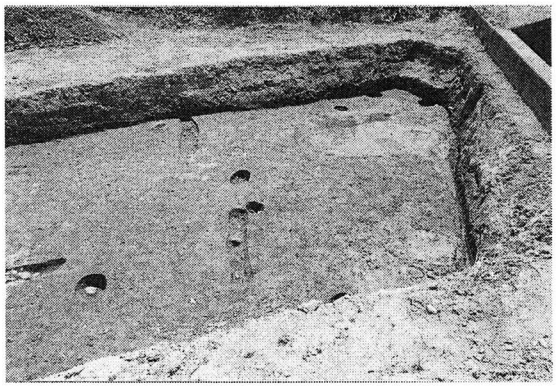
SD－2b　完掘状況（西より）



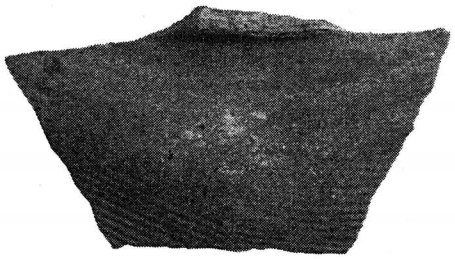
SD－2b　土層断面（東より）

2区　中央ピット群（西より）

2区　西側遺構完掘状況（北より）

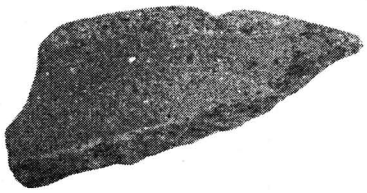


2区　西端遺構完掘状況（北より）

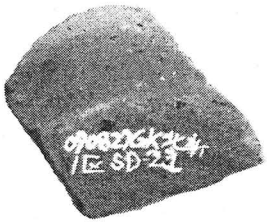


2

3

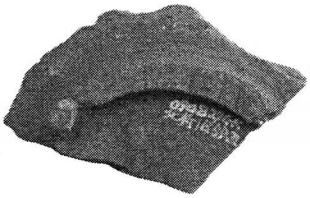


5



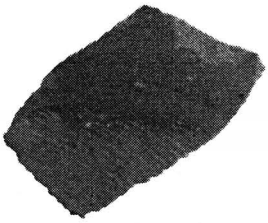
6

7

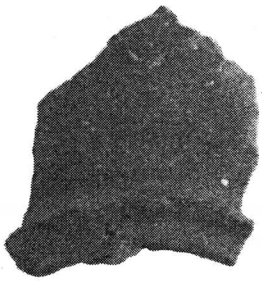


8

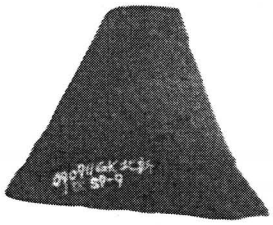
10



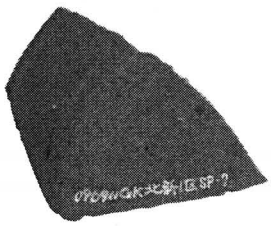
11



12

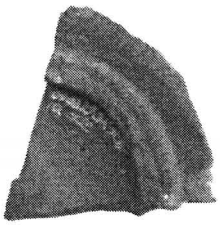


15



16

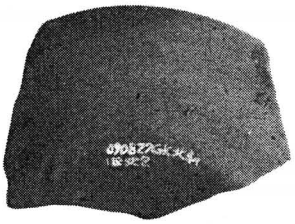
19



22

23

24



25

26

報告書抄録

ふりがな	ごうくぼたいせき
書名	郷クボタ遺跡
副書名	北陸新幹線整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	横山　貴広
編集機関	野々市町教育委員会
所在地	〒921-8510　石川県石川郡野々市町字三納18街区1番　Ｔｅｌ：076-227-6122
発行年月日	西暦　2011年2月28日

フリガナ	フリガナ	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
ゴウ　イセキ 郷クボタ遺跡	ノノイチマチ　ゴウ 野々市町　郷	17344		36° 53′ 62″	136° 58′ 76″	20090804 ～ 20090924	320㎡	北陸新幹線整備事業に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
郷クボタ遺跡	集落跡	古代・中世	掘立柱建物・溝	古代土器 中世土器	

要約

今回の調査区は広大な郷クボタ遺跡の北西側縁辺部にあたり、確認された主な遺構は9世紀中頃の掘立柱建物1棟と、区画溝と思われる15世紀代の溝2条であるが、従前の調査成果からこれより東側に9世紀中頃から10世紀初頭頃にかけて、大型の掘立柱建物が建て替えられながら整然と並んでいたことが確認されており、横江庄遺跡と同時期に営まれた公的性格の強い遺跡であることがわかる。また、中世期においては、東側一帯に近世初頭まで続く墓域として利用されている。さらに東側の郷クボタ遺跡中心部では、中世期の掘立柱建物が数多く確認されており、徳用クヤダ遺跡にみられる領主層の館をとりまく集落を形成していたものと思われる。

北陸新幹線整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査

郷クボタ遺跡

発行日　平成 23 年 2 月 28 日
発行者　野々市町教育委員会
〒 921-8510
石川県石川郡野々市町字三納 18 街区 1
電話　076-227-6122
bunka@town.nonoichi.lg.jp
印　刷　高桑美術印刷株式会社